

翻訳書の挿絵と近代日本画 一西村五雲《油断大敵》を手がかりに一

森田淑乃（京都市学校歴史博物館）

西村五雲《油断大敵》（一幅、大正12年、絹本著色、60.0×71.0cm、京都市学校歴史博物館管理）は、元京都市立本能小学校に伝わったイソップ物語「ウサギとカメ」を主題とした作品である。画面の下半分に眠るウサギ、左上に歩みを進めるカメを描き、競走中に勝利を確信した油断から眠るウサギが歩みの遅いカメに追い抜かされる場面を表している。本作は本能小学校の校舎新築を記念して五雲に制作が依頼され、校舎の完成した大正12年に同校へと贈られた。

明治時代から昭和時代初頭にかけて活躍した日本画家である西村五雲（1877-1938）は、岸竹堂や竹内栖鳳に師事し、主宰した画塾の辰鳥社から山口華楊を輩出した。五雲の動物画の実力は師の栖鳳と比較しても遜色ないと評価されていた。それにも関わらず先行研究は未だ少なく、同じ栖鳳門下の石崎光瑤との比較や、師の竹堂、栖鳳から弟子の華楊へと近代京都画壇の動物画の系譜をつなぐ人物として位置づけられてきたにすぎない。

本発表では、西村五雲《油断大敵》を翻訳書の挿絵、それにならった明治時代から大正時代にかけての教科書の挿絵と比較し、本作が翻訳書の挿絵に類似する構成で「ウサギとカメ」の一場面を描いた日本画であることを示した拙稿「西村五雲《油断大敵》——イソップ物語「ウサギとカメ」を描く——」をふまえ、翻訳書の挿絵を日本画へと引用することが、近代の日本画界においてしばしば行われたことを検証したい。

そのために本発表では、日本における「ウサギとカメ」受容についての先行研究をふまえ、「ウサギとカメ」を掲載した洋書の挿絵が翻訳書の挿絵にも踏襲され、その後の教科書の挿絵へと影響を与えていった過程をみていく。それらの挿絵と西村五雲《油断大敵》との比較を行い、ウサギとカメの描き方に翻訳書の挿絵からの影響がみとめられることを確認する。続いて、《油断大敵》に先立ち「ウサギとカメ」を主題に描いた竹内栖鳳、加藤英舟による作品をとりあげ、翻訳書の挿絵にみられる描き方との類似性を指摘し、挿絵が近代日本画に広く影響を及ぼしていた可能性を示すことを試みる。

おわりに、以上の検証をふまえ、西村五雲、竹内栖鳳等の画家たちは、「ウサギとカメ」を描く際に小学校の教科書の挿絵を参照したことが推測されることから、近代日本画が西洋の翻訳書の挿絵や諸外国の資料の影響下で発展した可能性がある」と結論づける。多くの画家が「新しい日本画」を求めて諸外国の書籍やその翻訳書を目にしていたと考えられるからである。